

□ レコード (CD&DVD)

山崎 浩太郎

・新譜の発売点数

日本レコード協会のサイト掲載の「新譜数推移」(<https://www.riaj.or.jp/f/data/others/sp.html>)の2023年の項によると、所属の正会員、準会員、賛助会員計65社の2023年発売の新譜において、クラシック音楽は12cmCDの邦盤4,380のうち68、洋盤2,088のうち548、合計すると6,468のうち616で、全体の10パーセント弱を占めている。

また、レコード店のHMV&BOOKS onlineのサイトでは、2023年のCD、SACD、DVD、ブルーレイディスク、LPの発売数を見ることができ (https://www.hmv.co.jp/search/adv_1/genre_VARIOUS_700/keyword_the/year_2023/)。HMVが扱っていないディスクがあることなどを考慮して、概数としてあげると、クラシックの総数は約5,600。うち国内盤は約1,300で、輸入盤が3.3倍の約4,300となる。そのうちCD約4,700、SACD約340、DVD約150、ブルーレイディスク約150、LP約200。正確ではないが、大ざっぱな傾向は見えるだろう。

・国内盤

メジャー・レーベルでは、20世紀に録音された往年の名盤、人気盤の意匠を変えての再発売が多数を占め、新録音の数が多くないのは、近年変わることない傾向である。ただし、旧録音を高価なシングルイヤー SACDで発売する流れは一段落した。

一方、ユニバーサルミュージックが発売したゲオルク・ショルティ指揮ウィーン・フィル他による《ニベルングの指環》の伝説的名録音の、再生不能とされていたオリジナル・テープを修復しての新たなマスタリングによるハイブリッドSACDが素晴らしい鮮度の音質となって好評を得た。このように、手間とコストをかけた修復による名盤の復活は、ソニーミュージックエンタテインメントや、各社と協力してのタワーレコードの独自企画など、一つの流行となっている。

また、ユニバーサルでは「CDで聴けるハイレゾ」としてハイレゾオーディオ技術の「MQA」を用いた「MQA/UHQ-CD」の新譜を数年来発売してきたが、この技術を持つ海外企業の経営破綻が4月に報じられた。9月に別会社を買収して事業が継続されている。

数少ない新録音では、ユニバーサルのアンドリス・ネルソン指揮ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ソニーのクリスティアン・ティーレマン指揮ウィーン・フィル、2種のブルックナーの交響曲全集のハイブリッドSACDが好セールスを記録し、2024年の生誕150年の記念年に向けてのブルックナー人気の高まりがうかがえた。

ワーナーミュージック・ジャパンは、国内プレスを減らし、ワーナー・クラシックスやエラートの新録音については、輸入盤に日本語解説を添付する方式で発売することが主流となった。これはキングレコード傘下のキングインターナショナルが、さまざまな海外レーベルの輸入盤に日本語解説をつけて国内盤

化させる方式と似ていて、クラシックの新録音CDの流通形式として、一つの流れとなりつつある。

邦人音楽家の新録音については、メジャー・レーベルの前記各社や日本コロムビア、エイベックス、さらにALMコジマ録音やフォンテック、マイスターミュージックなどが活発に制作を行なっている。近年、クラシックの新録音CDは、レコード店での販売に加えて、コンサート会場でのサイン会用のグッズとしての意義が大きくなっている。コロナ禍が一段落し、サイン会も復活したことから、来年以降もこの傾向は変わらないだろう。

・海外盤

メジャー・レーベルが新録音よりも旧譜の再発売を中心としているのは国内盤と同様だが、海外ではスター演奏家などの録音を集大成した大部で廉価なボックスに中心がおかれている。ワーナーのオットー・クレンペラー、ソニーのユージン・オーマンディのようなビッグ・ネームの指揮者ボックスに混じって、1970年前後の前衛音楽の録音プロジェクトを21枚にまとめた「ドイツ・グラモフォン／アヴァン・ギャルド・シリーズ」のように、かなりマニアックな企画も増えつつある。

新録音をさかに行なっているのはマイナー・レーベル、とりわけフランスの各社で、フランソワ＝グザヴィエ・ロト&レシエクルやイザベル・ファウストなどのスターを擁してCD53点を発売したハルモニア・ムンディ、パトリツィア・コパチンスカヤなどCD65点を発売したアルファ、フランス・バロックを中心にCD30点を発売したシャトー・ド・ヴェルサイユなどがその代表格である。また、スウェーデンのBISはハイブリッドSACD56点を発売した。廉価盤レーベルの雄であるナクソスも、多数のレーベルと提携した配信事業と並行してディスクも積極的に制作し、CD127点を発売している。

・「レコード芸術」の休刊

1952年創刊のレコード専門誌「レコード芸術」が7月号を最後に休刊したことも、クラシック・レコード界の大きなトピックである。年末の風物詩であった1963年開始の「レコード・アカデミー賞」がなくなったことの影響は小さくない。配信サイトでの復活が12月に予告されており、早期の実現を祈りたい。

・インターネット配信

ストリーミング配信の分野では、サブスクリプション方式によるアップルの「Apple Music」やアマゾンの「Amazon Music Unlimited」などが拡大を続けている。高音質のハイレゾ音源の無料サービス化が進むなかで、アップルは2023年3月にクラシック音楽に特化したアプリ「Apple Music Classical」の提供を開始し、日本向けも2024年の運用開始が予定されている。また同社はマイナー・レーベルの老舗、BISを9月に買収したことで話題となった。

ハイレゾ音源のダウンロード配信サイトでは、大手の「e-onkyo music」が、フランスのハイレゾ音楽ストリーミングサービス「Qobuz」(コバズ)との連繋を1月に発表した。既存のダウンロード配信は4月に終了し、新サービスの開始は12月に予定されていたが、技術的問題で延期されている。

こうした配信事業が競合するなかで、ドイツ・グラモフォンはレーベル独自の映像&音楽配信サービス「ステージプラス」日本語版を4月に開始した。音楽と映像を組み合わせる点に特徴があり、最新のライブ映像、過去の名盤のハイレゾ音源、アーティストのドキュメンタリーなど、さまざまなものを複合的に楽しむことができる。このサービスの今後も要注目である。